

NVC Monthly



寝屋川映像同好会会報

第81号(201604)

発行 竹田幸男



寝屋川市映像協会総会

平成28年3月27日(日)に映像同好会が所属する寝屋川市映像協会の総会が行われ、同好会からは竹田会長と新井副会長が出席しました。

総会では27年度の活動結果、会計報告、28年度の活動目標、予算などが審議されて承認され、また文化連盟の理事として新井副会長が選任されて閉会しました。

例会の窓

平成28年3月例会

日時：平成28年3月9日(水)

13:30~16:45

場所：産業振興センター5F 会議室(大)

出席者：新井 小笠原 佐伯 竹田 谷 田淵

欠席者1名 (50音順・敬称略)

例会次第

1. 報告・連絡・協議事項

(1) 会報随想 新井さん

(2) 日本を縦断する映像発表会の件。(3/6)

- ・いろいろな団体で賞を取った方が多い映像作品。皆さんもうまい方の作品を見て頂き、制作の参考にして頂きたい。

2. 協議事項

(1) 第10回 寝屋川映像フェスティバル出品作品の検討

・12:45 集合

・13:00 受付の机や椅子を並べる ・13:15 から開場予定

・当日の役割分担

総合進行 竹田

1部 司会 竹田 ・2部 司会 谷 ・3部司会 竹田

開会宣言 新井

映像撮影・画角ピント・音量レベルチェック 新井

写真担当 天野

受付 谷 佐伯 ・打ち上げ担当 佐伯

費用 4500円(作品出品者)

・16:30頃終演 17時までに片付けて打上げへ。

打ち上げ参加者 竹田 新井 谷

(2) 映像協会総会の詳細(3/27 13:00)

・出席者

・持参作品

3. 映写・研究発表

(1) 新井さん 「三井伝統無形文化 お弓式の記録」

・新成人が選ばれて作法の練習の場面から撮影された。

(2) 小笠原さん 「米原 雪の霊峰 伊吹山を望む」

「三島池の伝説」 6分17秒

・2つの内容が連続していたので、別々の作品に分けたらそれぞれの目的に合わせてストーリーがすっきりまとまるのではないかと。

(3) 佐伯さん 「当尾 石仏の里 岩船寺から浄瑠璃寺」

・書き出しの最後にパソコンのエラーが出たので、最後が尻切れのようになった。再挑戦を。

(4) 竹田さん 「映像同好会 PR映像」 3分(新春懇親会の同好会発表で映写)

4 . 各会員の最近の活動状況・情報交換・当面する問題点等

・佐伯さんのメールが開通した。

5 . 来月の例会 4 / 1 3 1 3 : 3 0 来月から市民会館 4 F



映画サイド バイ サイドを観て

新井正直

私の映像経歴と同じ経歴を持つ、映画「side by side」が、2012年に上映され、偶然録画してあったもの観て、感想を記します。

ここで、私の映像経歴を振りかえると、針穴カメラで始まり、16ミリカメラ、35ミリカメラ、ブローニーカメラによる静止画で、白黒からカラーフィルムへ移り、映画用のカラーフィルム〔感度10-15〕で撮る機会があり、映画への関心が高まり、三本百円の映画をよく観ていました。

その頃から、8ミリの動画撮影機が、私たちでも、買える価格になり、購入して、白黒から始め、カラーへと移り、3分のフィルムが、当時〔S38年頃〕で3000円と高価で、撮影回数も少なく辛抱していました。

ところが、アナログビデオの撮影機が、庶民でも買える価格になり、磁気テープに撮影映像を記録でき、フィルムより、安くて、長時間撮影できるので、転向し、また白黒〔音声が入り〕画像から始め、カラー画像へと移行し、かつデジタルカラービデオに進化した。

映画界も、近年デジタル映画へと移行、その内幕を、映画「side by side」に、まとめていた。本作は、キアヌ・リーブス〔俳優〕が、企画製作したドキュメンタリーで、一世紀使われてきた記録媒体が、銀塩フィルムからデジタルメモリーへ、アナログからデジタルへと変化していった。

「side by side」では、デジタル革命を、ハリウッドなどの錚々たる撮影監督、編集者などに質問して答えて貰っていた。

質問を受けるメンバーは、フィルム派とデジタル派に分かれ、アメリカ映画らしくストレートに意見を言っていた。

「フィルム派」

油彩画を捨てて、クレヨンを使うようなものだ、映像の質が劣るデジタル化は、歓迎できない。デジタルをあざ笑う人もいる。

「デジタル派」

デジタルビデオカメラは、フィルムで出来なかった映画の美しさを実現できる。

デジタル撮影の可能性を、すべて試したい。フィルムは後退する。

本編は、デジタル映画について語られていた。

ベル研究所でCCDが開発され、1980年半ばまでに、CCDのビデオカメラを作り、技術とメディアによって映画製作に使用していた。

始めは、インディジェント社がやったような挑戦で、標準画質のビデオを、劇場公開のためにフィルムに変換して実用化していた。

編集作業も変わり、フィルムの接合作業は手作業で、指先から血がにじんだりしたが、デジタル編集の初期は、フィルムをデジタル化し、磁気ディスクに保存し、1980年末には、アビット社が、コンピューター上で動くデジタル編集システムを開発したが、当時はバグがあり、五年後に使えるかなと思っていた。

デジタル技術は成長を続け、CGIが、ますます映画で多用され、本物に似た映像をコンピューターのCGIで、アニメーションや人や動物の動きを作成できるようになった。

撮影時の照明やレンズやフィルターの調整で最高の映像が撮れるが、カラー補正の技術が、ここ十年、高くなった。

ここで、私は新しい言葉を知る。〔カメラ監督〕で、カラー補正と画面のアングルを監督する人、普通は、エンディングでカメラと表示される人だ。

フィルム映写機では、長期間の映写で傷がつき、デジタルの映写機〔デジタルプロジェクター〕では、傷はつかないことだ。

デジタル・プロジェクターは、1999年ニューヨークとロサンゼルスとの4つの映画館で、2002年には150のデジタル映画館に増え、世界中に普及した。

映画のデジタル化は進んだが、カメラは遅れていたが、開発が進み暗い所でも人間の目と同じ映像が撮影でき、高感度でフィルムと同じ深さのあるチップもでき、画素数の大きいハイビジョンのカメラが開発された。

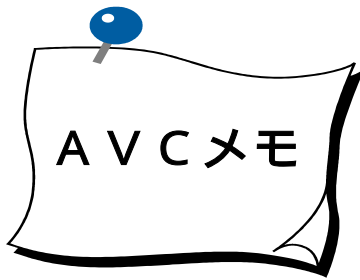
また、コンピューターも進歩し、高速処理できるようになった。

デジタルカメラで撮影した映画がアカデミー賞をとり、一気にデジタル映画が浮上し、デジタル撮影は、低予算で多くの映画が作られた。

デジタル映画は発展し、色々な可能性はあるが、今問題は、保存方法で、方式が変わり、古い作品が百年後に再生出来ないこともあると思った。

フィルム映画は、長期の保存に耐えるが、撮影機材やフィルムの生産は、縮小されるが、残るだろう。

私は、アマチュアとプロの違いは、コンピューターでCGIを使うこと、カラー補正するなど、各パートに専門家が、いるぐらいと思う。



スティックコンピューターという楽しみ

竹田 幸男

「上得意様限定」のようなダイレクトメールのチラシの中に、スティックコンピューターが少し安く提供される、ということで量販店を訪問しました。とにかく小さい、ということに魅力があったので、試しに1台手に入れたのが「Intel Compute Stick STCK1A32WFCR」。



CPUなどのメーカーであるインテル製で、正面には「intel inside」と白文字で大書され、本体は、実測すると、長さ103×幅38×厚さ13(mm)(突起部分除く)という小さいもので、手のひらの中に収まります。一端にHDMIプラグが突き出た形状は、少し大きめのUSBメモリ、という感じです。

こんな小さいものでパソコンか、と思いましたが、よく考えるとスマートフォンなども立派にパソコンの役割を果たしているのです、これもあり、かと思えます。

付属品としては短いHDMI延長コードと電源アダプタ、普通のパソコンのハードディスクに相当するのが半導体のストレージで32GB、メモリは2GB、CPUは(Intel® Atom™ Processor Z3735F (2M Cache, up to 1.83 GHz))で、4コア、動作周波数は1.33GHz、ウィンドウズ8.1がインストール済みとなっています。

上の写真では「intel・・・」の文字の方向からはHDMI端子が突き出た方が上、のような感じですが、入手した物は写真と反対に「intel」の文字を正しく見るとHDMI端子が下に突き出るような方向になります。端子のない方が上のように扱われています。

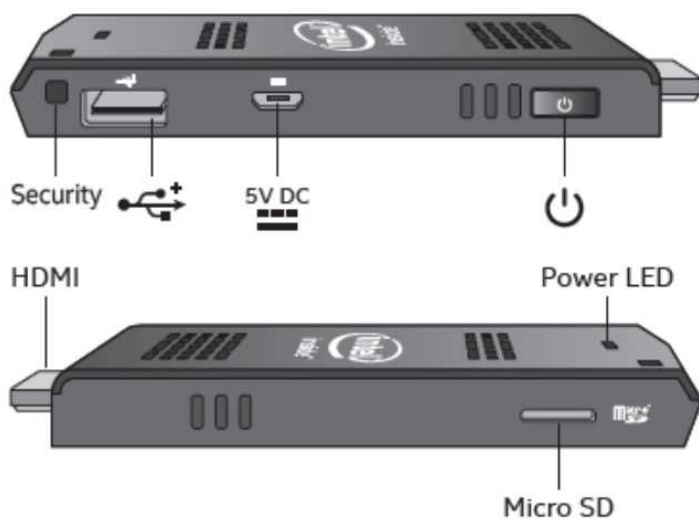
本体にはキーボードが無いので、購入したときはブルートゥース接続のキーボードとマウスがセットで組み合わされ、これを用いるようになっています。本体から突き出たHDMI端子を直接、または付属のHDMI延長コードでテレビ、またはモニターのHDMIソケットに接続し、ACアダプターからのミニUSBプラグを「5V DC」のミニUSBコネクタに接続すればパソコンとしての構成が完成します。

最初はセットアップが必要なので、先ほどのマウスとキーボードは、まだ使えません。USB端子とアダプタを使ってUSBキーボードとUSBマウスを接続しないとセットアップができません。なぜかというとブルートゥース機能は、セットアップが済まないとは動作しないので、最初だけUSBキーボードとUSBマウスを利用しなければなりません。今までデスクトップパソコンを持っている人は、そのキ

ーボードとマウスを利用すれば良いが、もしパソコンとして始めてスティックコンピュータを買った人は、それらの物を追加で買うか、借りてこなければなりません。ということは、このコンピュータは2台目以後のパソコンという立場にあるものと考えられます。

セットアップは取説（簡単な1枚物の印刷物）の通りにすれば簡単に終わり、このセットについていたウイルス駆除ソフト（マカフィーの1年間無料のもの）もスクラッチカードを削ってナンバーを打ち込めばインストールできました。

本体のストレージは32GBしかないので、どんどんソフトウェアをインストールできるものではありません。このパソコンはクラウドを活用するように出来て居るものと思われます。とりあえずCドライブを満杯にしないように、32GBのマイクロSDカードを左側面の「Micro SD」の端子に差し込んで、ソフトのインストールはできるだけ、この「Dドライブ」へ誘導してやります。



インターネットへの接続は無線LANでの接続になります。これは少し手間がかかったが内容は省略します。

立ち上がりは28秒と早く、インターネットへの接続やメールも、いつも使っているCore-i7のデスクトップパソコンにも遜色ないように感じます。デスクトップマシンや、そのメールソフトが壊れたときの代替機として持っておれば安心です。

動きが早い理由は、ハードディスクがなく、メインのドライブが半導体であることが大きいと思います。

ネットからウインドウズライブムービーメーカーをダウンロードして使ってみました。ハイビジョン映像の編集でも軽く動作します。ムービーメーカーは映像データ取り込みの時に編集用のプロキシ（代理）画面を生成するようなので、生成には少し時間がかかりますが、出来上がれば軽く動作するので、こんな小さなパソコンでもハイビジョンの編集が出来ることに驚きを感じました。プロキシ画面とは、編集用の「プレビューモニター」画面の映像はドット数の少ない映像を使うので、編集時の動きが速くなります。他にもプロキシ画面を用いる編集ソフト、たとえばビデオスタジオなどを使えばハイビジョン編集を実用的に行えると思います。本体の容量は小さいので、映像素材や編集中のデータ、完成したデータを保存するためのストレージとして外付けのHDDやSSDが必要です。

本体には放熱のファンもありませんが、長時間使っても少し暖くなる程度で、本体には「5V 2A」と書かれているので10W（モニターなど外部機器を除く）エコなパソコンです。とりあえず、可愛いパソコンのご紹介まで。